

第138号

教育



副会長挨拶
三教研に望むこと
学校自慢
支部トピックス（豊橋・知立支部）
教室の窓から・私の研究
研究大会の報告
調査委員会報告
授業力養成講座
教育随想



「授業力養成講座」への

参加のすすめ



三河教育研究会 副会長 柴田 昌一

三教研の「授業力養成講座」を知っていますか。三河の小中学校を参観し、授業力を高める研修会です。今年度は田原市、岡崎市、幸田町で実施しました。

私は幸田町立北部中学校、二年生数学科の授業を参観しました。この授業で生徒に与えられた課題は、折り紙で正三角形を作ることでした。生徒は何度も折り紙を折り直し、正三角形を作ろうとします。自分だけで正三角形の作成が難しいと思った生徒は、友達に相談をしたり、教師が用意したヒントボックスを見たりして正三角形を作っていきます。正三角形ができた生徒は、さらに別の折り方がないか模索します。授業者の山田泰介先生は、生徒に課題の説明をしたのみ、あとは生徒が五十分間自分たちだけで活動し続けました。中学校においても、教師主導の形ではなく、教師は支援に回り、生徒が主体的に追究し生徒相互の関わりで課題を解決する授業が可能だと思いました。

また、授業終了後の研究協議では、ファシリテーターの山本勝秀先生が話し合いの視点を三つ示し、この視点に沿って参観者がほぼすべての時間を使い意見を述べ合いました。参観者は、助言者から一方的に授業の講評を聞くのではなく、自分たちで意見を述べ合うことで、授業の見方や考え方を深める経験をしました。参観者自身が主体的に活動することのよさを実感したと思います。

三河には十八の市町村があります。特に意識的に求めなければ、自分の市町村以外の学校で授業を参観する機会ほとんどないのではないのでしょうか。

例えば、岡崎市では「チーム学習」と「校内フリースクール」の推進に力を入れてるように、それぞれの地域には、特徴的な学習形態や教育方法があります。三教研では市町村教育委員会と校長会、学校の協力を得て、選りすぐりの研修会を実施しています。

特に「授業力養成講座」は実践報告を聞くのではなく、選ばれた授業者が児童生徒を指導する姿を直接参観したり、経験豊かな講師が助言する研究協議に参加したりできます。地元の授業研究とは違った発見や学びがあることでしょう。

令和五年度は、豊川市、安城市、知立市で実施します。六月には三教研のホームページに案内があります。一度、他の市町村ではどんな授業が行われているのかを調べて学んでみませんか。皆さんの積極的な参加をお待ちしております。

三教研に望むこと

研修・研究の

発信源として

高浜市立高取小学校

中井 滋

令和三年一月の中央教育審議会答申で、「令和の日本型学校教育」の構築を目指すために、私たち教員の姿は、「子ども一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者」であると示されました。私たちには、子どもと共に考え、子ども自身が主体的に学んでいけるような授業づくりが求められています。正に、子どもが「今日も楽しみな」「これを考えたい」「みんなで話し合いたい」という意識で、学習に取り組んでいなければなりません。

本市でも、ミドルリーダー世代の先生が少なく、若い先生が増える中で教師力・授業力の向上は喫緊の課題です。アフターコロナ時代の研究の在り方も求められる中、本校では、事前検討会のスリム化や研究授業の会場設定、動画の活用、オンライン会議など、これまでの「研究を止めない」という姿勢の中で得た知恵と工夫を生かしながら、本年度も研究を深めてきました。

また、全教員に公開授業の実施と参観を課し、授業力の向上を図っています。

授業後の協議会では、「あの手立ては？」「私だったら…」「あそこで子どもの反応を見逃してはいけない」など、熱い議論を交わします。子どもたち以上に先生方が追究の鬼と化します。

何十時間も準備に時間をかけた授業も、ほとんど準備をしなかった授業も、本時のねらいをどれほど達成したかだけを見れば、そんなに差はないかもしれませんが、しかし、「わずかな差」は必ずあります。その「わずかな差」のために、私たちは日々切磋琢磨し、その「わずかな差」を子どもたちの中に積み重ねていくことが私たちに与えられた使命です。

三教研は、子どもたちを中心に据え、個を大切に授業を理念として実践しています。個々の子どもを対象として、働きかけ、関わり、その結果「生きる力」につながる、知識や技能を獲得することを目指します。また、若い先生方にとって、各市町村の教研や三教研の各部会が実施する夏季研修会・教育講演会をはじめとする研究実践発表や授業公開等は、大きな刺激や蓄えとなっています。引き続き、三教研が、ますます重要となる授業力の向上、先生方の日々の実践に結びつく研修・研究の発信源として展開されていく研究会であることを願ってやみません。



どうする、どうする。

新城市立東郷東小学校

山崎 幸司

一月、大河ドラマ『どうする家康』が始まりました。三河地区ゆかりの主人公登場に各地区での関心も高いのではないのでしょうか。今回の注目は、家康がナイーブで頼りない役柄であることです。頼りない家康が決断に迫られながらもどのようになり成長していくのか。一般的な家康像とは異なる脚本が、新しい世界を見せてくれるのではと期待が高まります。

学校現場も教育の多様化によって、常に決断と成長を求められています。今後の三教研の役割を考えるとき、やはり授業力向上の場としての重要度の高さを思い浮かべます。特に、他地域との交流は絶対の機会であり、大きな魅力です。

「はじめに子どもありき」を教育理念にもつ本会は、言い換えれば、「はじめに教員ありき」である必要もあります。先進的で魅力のある研修テーマの提示や参加者の意を汲み満足感を得られる研修方法の構築など、授業力向上の主役である教員を支えるファシリテーターとしての役割を期待したいと思います。私たちも三教研の魅力を捉え、主体的に学び続ける教員でありたいと思います。

よりよい決断と成長の期待を込めて、「どうする三教研。どうする私たち」

地域に誇りを

刈谷市立住吉小学校

田中 克典

本校では主題研究の柱として「地域学習」に重点を置いていきます。刈谷市の中心に位置し、近くに公共施設が数多くあるという利点を生かして、本物を見る機会を増やしたり、そこで働く方を招いて生の声を聞いたりすることができず。そんな恵まれた環境の中で、子どもたちは自ら探究し、学んだことを生かして行動しようとする姿が見られました。

今年度、六年生は歴史学習の中で、地域の偉人である「水野勝成」を取り上げました。刈谷市のマスコットキャラクターの「かつなりくん」が徳川家康の従兄弟であったり、江戸幕府の基礎となる幕藩体制の要所を任されていたりしたことを知った子どもたちは、追完意欲を高め、単元の最後には「私たちが暮らす刈谷市ってすごいんだ」と誇らし気に語る姿も見られました。そんな子どもたちを見て、私は学びが身近に感じられることで得られるパワーというものを再認識できました。

令和五年は、大河ドラマの影響もあり、この西三河に注目が集まることを考えられます。「三河のすべての子どもたちに、三河の教師による、優れた教育を保障する」という思いを胸に、多くの仲間とともに『地域に誇りをもてる子どもの育成』を目指していきたいと思えます。



ユニークな校歌を一生の思い出に

碧南市立中央小学校

本校の校歌はかなりユニークです。本校はその名のおり碧南市の中央に昭和五十二年に開校しました。校歌制定発表会が昭和五十三年三月八日に開催され、全校児童が作詞者、作曲者から直接歌唱の指導を受けたという記録があります。当時の校長先生は「歌詞もリズムも現代の子にぴったりで、曲の途中に入る手拍子がまた新しい感覚で子どもたちを引き付ける。」と記しています。

まず歌の最初に「序」があります。物々しい雰囲気であったり歌い出し、その後朝日が差し込むように一気に「ぱあつ」と明るく前奏が始まります。前奏中は子どもたちが一斉に手拍子で「ズンチャッ！ズチャッ！」と裏を打つ難しいリズムを明るく刻みます。手拍子は歌の途中にも出てきます。サビが始まると歌いながら再び手拍子です。さつきよりテ



校歌制定発表会にて作詞者・作曲者へのお礼

ンポが速く、さらに元氣よく盛り上げます。そして最後は高い声で「金波銀波七つの海へ」と歌い上げます。初めて校歌を聞いたとき、手拍子とそのなかなか難しいリズムに驚きました。コロナ禍となつてからは、残念ながら全校児童が揃って校歌を歌うことができていません。子どもたちにこのユニークな校歌を誇りに感じ、一生の思い出にしてもらうためにも、そろそろみんなで歌う機会をもちたいと思っています。ちなみに、卒業生が通う中央中学校の校歌も同じ作詞者で、中央小学校と同じように前奏の前に「序」があります。手拍子こそないですが、その歌詞には「金波銀波」とあり、子どもたちは小学校からの繋がりを感ずることでしょう。

(文責・多田 宏明)

伝統行事「野外劇」に想う

豊橋市立石巻小学校

本校には「野外劇」という伝統行事があり、全校児童が運動場で石巻山を背景に、創作劇を演じます。演目は『ダイダラボチ』『てんでんてんぐの舞い踊り』『笛吹ジンゴ』の三作品。いずれも石巻にまつわる民話をもとにした作品であり、この三話を毎年順番に上演しています。始まりは昭和五十三年。以来親子共に体験し、地域の皆様にも応援、ご協力をいただいている本校の誇り高き行事となっております。



石巻山を背景に演じる子どもたち

野外劇が始まった当時の先生に話を伺うと、「野外劇は、石巻を愛し、石巻を誇りに思い、石巻を支えていく子どもたちを育てたいという思いで始まった。」とのことでした。他校には例のないこの挑戦には、「この地でこの子た

ちを育てたい」という強く熱い思いが込められていたのです。そして、この挑戦は、四十年以上の時を経て受け継がれ、姿こそ少しずつ変えてはいるものの、子どもたちにかける願いは何も変わっていません。脈々と受け継がれてきた伝統のすばらしさを改めて感じます。

子どもたちを取り巻く生活環境は、めまぐるしく変化しています。いろいろなことが便利になり、効率的になっていきます。一人一台のタブレットを傍らに置いた授業が展開され、すばらしい環境が整ってきています。しかし、便利になればなるほど、効率的になればなるほど、考えさせられることも多々あります。それは、人とかかわり、実際に足を運び、見て聞いて感じて考え、体験的に学ぶことの重要性です。

本校では、郷土で自立し、やがて郷土を支えていく大人になれるよう、「郷土学習」「体験から学ぶこと」を中心に全職員で取り組んでいます。「野外劇」は郷土に学び、郷土に発信する大切な場です。前出の先生のように、強く熱い思いで子どもたちとかわり、伝統を大切に守りつつ、これからの時代をたくましく生きていける子どもを育てていきたいと想う日々です。

(文責・原田 直美)

新たな一人を出さない！ 一人を救う！

知立市不登校・いじめ未然防止対策協議会

本市では、知立市不登校・いじめ未然防止対策協議会(平成九年度発足)が、「一人一人を生かす」「新たな一人を出さない！一人を救う！」をテーマに、不登校やいじめの未然防止に焦点をあてて取り組みんでいます。有識者をはじめ二十六名で委員を構成し、実際の活動は、校長を顧問、教頭を部長に置いた、研修・相談・広報の三つの専門部会と市適応指導教室(平成五年度設置)が行います。

ための進路説明会、チャレンジキャンプを行います。チャレンジキャンプは、不登校や不登校傾向にある市内小中学生とその担任等が、自然の中でコミュニケーションをとりながら様々な体験活動を行うことで、自立へのサポートにつなぐ活動です。本年度、愛知県野外教育センターでの一泊二日の生活には、生き生きと活動する子供たちの姿がありました。

広報部会は、広報誌「むすびあい」(年四回)と、一年間のまとめ冊子「たくましく生きる」の発行を行います。広報誌は、小中学生の家庭のほか、幼稚園児の家庭や関係機関にも配付し、本協議会の取組を知ってもらっています。

(文責・本多 泰裕)

支部トピックス

研修部会は、学級(絆)づくり研修会、不登校・いじめ未然防止講演会、授業力向上プロジェクト(授業P)を行います。授業Pは、不登校やいじめの未然防止には子供を引きつける魅力ある授業が不可欠と考え、各校一名、計十名の教員がチームとなり、子供が生き生きと活動できる授業づくりについて研究します。本年度は中学校社会科で授業研究会を行い、その様子を、授業P通信「学び舎」で市内全職員に広めました。相談部会は、SCを講師にした事例研究会、なやみアンケート、不登校生徒の



R4チャレンジキャンプ川遊び

教室の窓から

本物に学ぶ

豊田市立下山中学校

津坂明宏

本物に出会い、本物にふれて、本物に学ぶことは、生徒のやる気をかき立て、活気をみなぎらせ、将来への生き方の選択の幅を広げることにつながります。本校では、チャンスがあれば、その機会を十分に活かそうとしてきました。

昨年度、本校は創立50周年記念事業を開催するにあたり、記念講演会と記念式典を別々の日に設定しました。記念講演会では、下町ロケットのモデルとなった北海道の植松電機社長の植松努氏を学校に招き、講演を聞いた後、グラウンドで自作のロケットの打ち上げを行いました。記念式典では、本校出身者で、社会で活躍するパティシエ、元箱根駅伝ランナー、劇団員を招き、下山トークショーを行いました。各々、夢のもち方、夢を現実のものにするための方法等の話を聞きました。生徒自身が感じたことや思ったことについて、講師の皆様との意見のやり取りの過程で、さらに深く考えることができ、多くの生徒が感銘を受けました。

また、日本で開催のWRCの三河湖・

下山コースは、本校の学区の一部です。昨年度はデモランを見学する機会をいただき、日本のトップドライバー勝田貴元選手の手を運転する車が、校内のグラウンドを駆け巡りました。音とスピード、そして砂ぼこりに圧倒されました。今年度はWRCの当日に、ボランティア活動をしながら、観戦をしました。観戦の前夜で、生徒のもったイメージは大きく変容し、将来への見方や考え方の間口を広げました。

さらに、豊田市の名誉市民であり、光触媒でノーベル賞候補の藤嶋昭先生にお越しいただきました。研究のきっかけや、意気込み、大切にしていきたいこと等の話を聞き、全校生徒が光触媒を使った実験を体験しました。話と実験の魅力に惹かれつつ、どうして学ぶのか、学ぶ価値について考えることができました。これからの社会を生き抜く新たな価値観を生み出すため、本物とふれ合うことで、生徒の心を耕しつつ、将来の進路選択の幅を広げていきます。



藤嶋先生から実験についての説明を受ける生徒

私の研究



オールイングリッシュを楽しみ、 意欲的に自己表現できる子どもの育成

― 六年外国語科 教科担任制を生かし、教室をとりだす英語学習 ―

みよし市立天王小学校

関川麻美

一 はじめに

本校では、高学年で教科担任制を取り入れ、外国語科の授業で言語活動に積極的に取り組んできました。子どもたちは、決まった基本表現を使って仲間と楽しく関わられる一方で、級友やALT以外に自分の考えを英語で発信する機会が少ないという実態がありました。そこで、教室をとびだして、英語が伝わる楽しさを感じてほしいと思いい、外国産の食材を使ったオリジナルのmy井ぶりを売り出す学年ワークショップをゴールとした、本実践を行いました。

二 実践

(一) イングリッシュスイッチの設定

毎時間の授業で、子どもも教師も英語だけを使う「イングリッシュスイッチ」の時間を設定し、子どもたちは、「今は英語だけ」と意識的に切り替えることができました。ここでは、即興性を高めるスモールトークやキーワードクイズなどを継続しました。発話量や新しく知った単語を記録表に残していくことで、子ども自身も成長を実感し、ワークショップに向けて自信をつけることができました。

(二) World井CUPでmy井ぶりをアピールしよう

家で調べた外国産の食材をカードにして、級友と交換しながらmy井ぶりを作りました。魅力が伝わる表現を考える話し合いでは、魅力は産地や味だけではなく、見た目や食材同士の組み合わせもあることに気付き、視野を広げてアピール文を考えることができました。ワークショップでは、教室をとびだし、学級の枠を越えて、自信をもってmy井ぶりを売り出したり、仲間の表現をよく聞こうとしたりして、英語で楽しみながら関わるようになりました。

三 おわりに

単元を通して、子どもたちは生活の中での世界とのつながりを意識し、教室の外でも自分の英語が伝わる喜びを感じるようになりました。今後も、英語を通して教室をとりだして、子どもたちを育んでいくために、実践を続けていきたいと思っています。



my 井ぶりをアピールする子ども

研究大会の報告

生徒指導

自己尊重の心と自己実現の力を育む

生徒指導

令和四年度愛知県生徒指導研究大会
期日 十一月九日(水)
場所 ライフポートとよはし
参加者 四百五十名
研究発表

- 目標達成や課題解決を体験させ、自己肯定感を高める生徒指導
- 自己を見つめ、仲間とかわかり合う中で、自己有用感を高め、主体的に物事に取り組もうとする子の育成

○社会の一員として、情報リテラシー向上を目指す取組

指導高評

愛知県教育委員会

義務教育課 主席指導主事

小川 康夫 先生

本年度の愛知県生徒指導研究大会は、三河地区の担当で、豊橋市のライフポートとよはしにて盛大に開催されました。

研究発表では、三河・尾張・高校で、それぞれ一名の先生が発表されました。

三河ブロックからは、豊橋市立岩西小学校の齊藤峻介先生が、学級におけるレジリエンストレーニングやスピーチタイム、下級生とのペア活動、学級や個人の

悩みを解決する絆会議を手立てに、自己を見つめ、仲間とのかかわり合いの中で、自己有用感を高め、主体的に物事に取り組める子の育成を図った実践が発表されました。

また、紙上发表として、刈谷市立刈谷東中学校の中島洋介先生が、「自己のよさや可能性に気付くことができる生徒の育成」、高浜市立港小学校の竹市健二先生が「自分らしさを見つけて、受け入れ、生かそうとする子どもの育成」と題した実践を、大会に寄稿されました。



発表を受けての研究協議

研究大会に参加して

高浜・高浜中 伊藤 先雄

この研究大会では、小・中・高と校種の異なる研究発表を聴くことができました。近年、新たな課題となっている同一性障害への理解や支援、校則の見直し等についての実践も紹介され、大変参考になりました。日々の自分自身の指導や学校の生徒指導の在り方を振り返るとともに、改めて児童生徒に寄り添う指導の大切さを学ぶことができました。

教育現場において、生徒指導上の問題は、社会環境等の変化に伴って極めて多岐にわたるものとなっています。この大会で学んだことを、今後の生徒指導に役立てていきたいと思えます。

令和三年・四年度 実践事例集

「新しい時代に求められる教育」

調査委員会

— 主体的・対話的で深い学びの実現を図る授業実践Ⅱ —

三河全域の実践を一冊に

調査委員会では、諸事業の推進し、活動の充実を図るために主題を設定し、二年間をかけて、必要な教育統計資料等の調査・研究活動を行っています。

新学習指導要領が小学校では令和二年度から、中学校では令和三年度から全面実施されました。しかし、「主体的・対話的で深い学び」を具現化した授業の在り方については道半ばであり、継続して研究すべきと考えました。特に、育成すべき資質・能力を明確にし、各授業・単元の中で位置づけて、深い学びの実現を図る実践を推進する必要があると考え、主題を「新しい時代に求められる教育—主体的・対話的で深い学びの実現を図る授業実践Ⅱ—」と設定し、各支部で実践してきました。そして、令和四年度、二年間を通した各支部の代表校の実践の成果と課題を一冊にまとめた事例集を発行しました。

この事例集は、各支部の特色あるすばらしい実践を多数まとめているので、私たち教員の資質・能力のさらなる向上に結び付けていくことができると確信しています。さらに、巻頭には、愛知教育大

学教授の江島徹郎先生より三河教育に対する提言をいただいています。多くの先生方が、この事例集を有効に活用されることを期待しています。

○実践事例掲載校一覧

【小学校】

- 豊橋市立高師小学校 豊川市立代田小学校
- 蒲郡市立三谷東小学校 新城市立鳳来寺小学校
- 田原市立福江小学校 豊根村立豊根小学校
- 岡崎市立広幡小学校 碧南市立棚尾小学校
- 刈谷市立富士松東小学校 豊田市立寺部小学校
- 安城市立桜林小学校 西尾市立一色東部小学校
- 知立市立知立南小学校 高浜市立高浜小学校
- みよし市立三好丘小学校 幸田町立深溝小学校

【中学校】

- 豊橋市立二川中学校 豊川市立中部中学校
- 蒲郡市立中部中学校 新城市立八名中学校
- 田原市立田原中学校 設楽町立設楽中学校
- 岡崎市立翔南中学校 碧南市立南中学校
- 刈谷市立依佐美中学校 豊田市立旭中学校
- 安城市立東山中学校 西尾市立福地中学校
- 知立市立知立中学校 高浜市立南中学校
- みよし市立三好丘中学校 幸田町立南部中学校

授業力養成講座

中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして

授業力養成講座Ⅰ（夏期講座）

【東三河】
○期日 八月二十三日（火）
会場 田原文化会館
講師 算数科 豊橋市立南稜中学校長 久野 哲司 先生
・「この子」に迫る授業づくり」
受講者 二十五名

【西三河】
○期日 八月二十四日（水）
会場 岡崎市総合学習センター
講師 理科 筑波大学附属小学校 鷺見 辰美 先生
・「これからの理科教育」
前幸田町立幸田中学校長 山本 勝秀 先生
・「二十五年ぶりの数学」
ICT活用 岐阜聖徳学園大学教授 芳賀 高洋 先生
・「ICTの創造的活用と創造的思考」
受講者 六十七名

本年度も魅力あふれる講師の先生方をお招きし、受講者が学びたい講座を選択し、授業づくりに対する実践的な理論について熱心に学びました。講師の先生方の経験に基づいたお話しは、受講者の研究心を大いにゆさぶりました。また、実際の授業場面を想定した

授業展開について、アイデアを出し合ったり、テーマに沿って受講者同士で交流したりする
ことで、お互いに刺激し合い、教師としての力量向上につながりました。



与えられたテーマについて、グループで熱心に考えを伝え合う様子

受講者の声

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立を実現するには、できない子を生かす、学級全体の学びにつなげていけばよいという発想に共感した。（東三・算数）
単元の山場では、最初に設定した大きな疑問を、今まで学んだ知識を生かして考えさせ、解決できるようにしていくことが大切だとわかった。（西三・理科）
教師主導型に陥りやすい単元や学習内容でも、教科書を基にして立ち止まって考える場をつくることで、学び合いの授業に近づくことがわかった。（西三・数学）
ICTの創造的な活用について、単に活用するだけでなく、批判的、対話的、協働的といった総合的な活用を意識していきたい。（西三・ICT活用）

授業力養成講座Ⅱ（秋期講座）

【東三河】
○期日 十月二十六日（水）
会場 田原市立田原東部小学校
授業者 高瀬 隼人 先生
講師 算数科 久野 哲司 先生
受講者 二十六名

【西三河】
○期日 十月二十日（木）
会場 岡崎市立翔南中学校
授業者 松井 昭憲 先生
講師 理科 鷺見 辰美 先生
受講者 二十七名

○期日 十月二十七日（木）
会場 幸田町立北部中学校
授業者 山田 泰介 先生
講師 数学科 山本 勝秀 先生
受講者 十七名

○期日 十一月十四日（月）
会場 岡崎市立羽根小学校
授業者 木下 智尋 先生
講師 図画工作科 芳賀 高洋 先生
受講者 十六名

東三河一名、西三河三名の先生方の授業を参観しました。どの授業も、子どもが主体的な活動を支える教師の支援があり、問題と真剣に向き合ったり、自分の考えを積極的に周りに伝えたりする子どもの姿が数多く見られました。公開授業を基にした研究協議では、より

学びが深まるように、多くの協議会で講師の先生にフアシリテーターを務めていただきました。おかげで、夏期講座の内容とつながりのある協議会となり、受講者にとって価値のある時間となりました。



子どもに問い直しをする高瀬先生

受講者の声

「子どものわかり方を理解する」という言葉が一番心に残った。一人一人に寄り添いながら教材研究を行いたい。（東三・算数）
「知識をおさえようとしてもおさえられない」、意味を自分なりの言葉で書くことや書いたことを表現していくことで知識が自然と身についていくという講師の先生の言葉は、目から鱗だった。（西三・理科）
全員の学びと考えると、習熟度別の授業も「大多数」であって、「全員」の学びではない授業なのだと思っていた。子どもが考えたいと思える環境をつくるのが、「大多数」を「全員」に替えるヒントになるような気がした。（西三・数学）
教科にプログラミングを取り入れることの難しさはあるが、プログラミングありきではなく、一つのツールとして扱えるようにしていきたい。（西三・ICT活用）

どうする 令和の教育



岡崎市教育委員会
教育長

安藤 直哉

『どうする家康』が始まりました。

家康は嵐の松本潤、その正妻には有村架純が配役されました。この二人の周辺を阿部寛や岡田准一など、個性豊かな役者が固めています。脚本は古沢良太、映画『ALWAYS三丁目の夕日』やドラマ『リーガルハイ』で知られる古沢が、どんな視点で家康の生涯を描くのでしょうか。桶狭間の戦、三河一向一揆、本能寺の変等、家康は絶望的な状況に幾度も陥ります。この家康と同様、今、教育現場は、歴史的な転換期に立っていると思います。働き方改革では、多くの自治体が、月四五時間、年間三六〇時間の上限を条例で定めました。ただ、国の動きをみると、本丸は給付法の改正にありそうです。部活動改革では、昨年、国は、部活動

の地域移行を正式に提言しました。次期学習指導要領から、部活動の記載が本当に消えるとなれば、来年度から六年程度で地域移行を実現する必要があります。

昭和、平成の教育は、教師の献身的な働きと全国に広がるインフラとも言える部活動に支えられてきた面があります。この二つを失うとき、学校は、その在り方自体を、本質的に見直すべきだと思います。

佐藤学氏（教育学者）のこんな随想が掲載されました。「授業崩壊の姿が十年前から様変わりした。：新しい授業崩壊は、学びの偽装として起こっている。：その学びの偽装は、多くの教師が気づいていない。：かつての授業崩壊の根底には、学校や教師や授業に対する子供たちの期待があった。その期待が裏切られ、傷つき、活路を見出せなくなった時、机に突っ伏す、教室を出ていく、おしゃべり、授業を妨害するという行動となって現れた。：現在の子供たちは、残念なことに、学校や教師や授業に期待を抱いていない。その結果が学びの偽装なのである。」

分かっていない子供がいるのに、分かった子供の意見だけで授業を進める。子供が問題を解けていないことに気付かず、

答え合わせをする。そもそも、できない、分からない子供がいるのに、適切な支援もしない。もしも、こんな授業が続いていたら、子供たちが、学校や教師や授業に期待しないのは当然です。実際、ある中学校の先生から、こんな話を聞きました。

数学が苦手、基本的な問題も解けない生徒がいたそうです。当然、授業に対しても消極的だったようです。ところが、十月ぐらいいから、問題も解けるようになり、何より、授業中、笑顔が多くなったそうです。先生が、

「〇〇君、最近、授業で頑張るようになったね。何か心の変化があったの。」と、尋ねました。その生徒は、

「僕、塾に行くようになったら、授業がよく分かるようになったんです。」と、笑顔で言ったというのです。学校で分からないことは、塾で解決したのでしょいか。

働き方改革で教師の時間が制限され、部活動が地域移行され、その結果、肝心の学びも十分に提供できなかったとしたら。また、その前兆が、すでにある急激な不登校の増加だとしたら。：

まさに、「どうする 令和の教育」が、学校に突き付けられていると感じます。考えているだけでは、何も解決しません。他人任せにし、与えてもらうことばかり求めても、何も進みません。確かな理想を掲げ、現実的な策を考え、実行す

る勇気をもったとき、初めて「こうする」ことができるのではないのでしょうか。東岡崎駅に、若き家康の騎馬像があります。その眼光は京都に向いています。家康は、「厭離穢土 欣求浄土」を理念に、生涯をかけ、二六〇年の平和を実現しました。そして郷土の英雄になったのです。私たちも、三河の教育の真髄を大切に、目指すべき方向を定め、勇気をもって前へと進んで行きたいものです。

編集後記



ここに令和四年度の最終号をお届けいたします。この一年間、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。また、「教育みかわ」を愛読くださった皆様、本当にありがとうございます。

皆様の日々の教育実践に役立つ会報誌となるよう、一層の充実を心がけて取り組んでまいります。

表紙の写真

『未来をつかめ!』

撮影 豊川市立一宮東部小学校
川合 優奈先生
カット 豊橋市立多米小学校
田中 千晶先生